

McC. Brooks, Ch. and Craneheld, P.F. (eds):
The Historical Development of Physiological
Thought. Hafner, New York, 1959.

六 投稿原稿は、コピーを一部添付すること。原稿は著者校正の際も原則として返却しないので、手元にコピーを一部残すこと。

七 著者校正は、原則として原著・総説・研究ノート・広場・資料を対象とし、初校のみとする。校正は印刷上の誤植を訂正するに留め、原稿の改変や、その他の組み替えは認めない。校正刷りの返送期日を厳守すること。期日までに返却されない場合は責とみなす。

編集後記

第一〇二回総会の抄録号をお届けする。

一 昨年の記念すべき第一〇〇回(東京・順天堂大)と昨年の再出発というべき第一〇一回(京都・府立医大)の盛会のあとをうけて、今総会開催にあたり、吉田忠会長以下、準備委員会の方々にはぜひぶんお骨折りいただいているように仄聞している。その甲斐あって、蓋を開けてみれば一般演題が第一〇〇回の七六題に次ぐ七二題の多きを数え、まずは喜ばしい▼しかしながら、昨年の学会会報でも厳しい指摘があったように、近年では質疑応答の不活発や時間超過というかたちで、演題の多さが負の側面を呈する事態もめずらしくない。演者にとつては勿論、聴講者にとつても、また学会の水準維持の点からも、的確かつ簡潔な質疑は不可

八 刷り上がり一〇印刷ページ(四〇〇字詰原稿用紙で二四枚)までは原則として無料とし、超過分と図表製版の実費は著者負担とする。

九 論文別刷は五〇部単位とし、実費で作製する。別刷希望者は校正刷同封の申込書に部数を明記すること。

一〇 原稿の送り先

〒二三〇三三 東京都文京区本郷六一一七一九

財団法人日本学会事務センター学会共同編集室内、
本郷綱ビル二階

日本医史学雑誌編集委員会

欠のものである。質疑成立の前提は各演者の時間厳守である。自戒も含めて、一層の注意を促したい▼編集委員として抄録号の校正を分担していて、とくに私のような横文字に弱い者が感じる(理解できること)は、主として漢字表記にかかわる問題である。紙面超過が問題となることも多いが、これは改行をやめる等の措置により回避できることが多い。原稿自体の表記の不審は、校正者の嫌焉たる思いとともに残ることになる▼ともあれ藩政時代、二高・医専・東北帝大時代以来の医史に富む仙台にふさわしい、実り多き総会にしたいものだ。多くの会員諸氏の「来仙」(準備委員会からの演題受領のはがきで知ったことば)を願うものである。

(町 泉寿郎)